

# 大学における学修のモチベーション I

－学修を継続するための意欲付け－

酒井 克彦\*

(令和元年10月31日受付)

## Motivation for learning at university I

－ The motivation to continue learning －

Katsuhiko SAKAI

(Received Oct. 31, 2019)

### Abstract

A clear purpose is necessary for university students to continue learning. This paper aims to reduce dropouts at universities. First, understand the situation of dropouts, the impact on university management, measures at various universities, and students' lives. Then, with reference to the motivational theory, motivational means of learning were examined. As a result, it was concluded that it would be quite effective for students to carry out "MBO: Management by Objective", where they set their future professions as "DREAMS" and register their goals for each semester.

**Key Words:** learning motivation, dropout, leave of absence, MBO, professions, dreams, goals

## 1. はじめに ～100人規模の中退の現状～

入学者1,000人規模の日本の大学では、毎年100人以上が中途退学(中退)する。その9割以上が正規雇用につけない。大学は中退対策をとるも、結局自己責任とされていく。中退理由には、「学修意欲喪失・学業不振」がある。

学生が高い意欲を持ち、自発的・自律的に学修することは、教員にとって大きな喜びである。なぜ学ぶのか?の解を学生自身が意識して持つことで、学ぶ態度が変化する。

本稿ではまず、2章で日本の大学の中退の状況・大学運営への影響・諸大学での対策を紹介する。3章にて勉強が苦手な学生の状況を把握、4章で勉強嫌いの原因から出発し、モチベーション理論に基づいて、学修意欲付けの施策を検討した。この検討の結果、学修意欲を継続するには、「学生が明確な学修目的意識を持つことが有効」との結論に達した。5章で学生の感覚・意識について言及し、6章に具

体的施策として、学生が「目標管理」を行うことが有効だというデータを示す。そして「目標管理」により「学修意欲の維持・向上」を図り、未然に「リテンション(退学防止)」の実現効果が期待できることを述べる。最後に以上の議論をまとめる。ここでは特に、本学のような地方の工業系私立大学機械系学科の学生を対象とした。

## 2. 日本の大学の中退状況とその低減施策

### 2.1 中退の状況

中退には、「学業不振」が大きくかかっている。文部科学省の調査<sup>1)</sup>によると、2012年度の国公私立大学・公私立短期大学・高等専門学校中退者総数は、全学生数2,991,573人中 約3%にあたる79,311人だった。中退の最大要因は「経済的理由」(20.4%)で、「転学」(15.4%)、「学業不振」(14.5%)、「就職」(13.4%)と続く。また、「勉強に興味を持てなかった」、「学業不振」が、主な理由とする

\* 広島工業大学工学部知能機械工学科

研究・報告もある<sup>2)3)</sup>。「勉強への興味の無さ」と「学業不振」は、同根と考えられる。「経済的理由」と「学業不振」とは、鶏と卵の関係で、退学の申請状況次第で、分類が替わる恐れもある。すなわち、留年して奨学金がなくなり、経済的に苦しくなった。勉強よりアルバイトに追われ、成績が低下... などである。

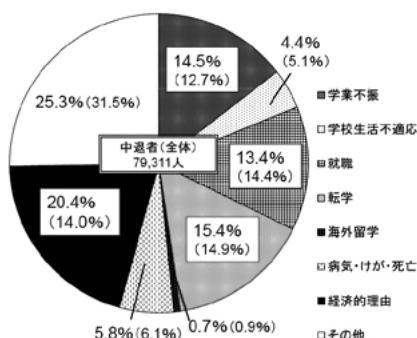


図1 中途退学者の状況 (平成24年度)<sup>1)</sup>

## 2.2 大学卒業のメリット ～“大学教育の便益<sup>4)</sup>”～

大卒と高卒では、卒業後、生涯にわたり所得差がでる。大卒の意義がここにある。生涯所得の違いが、大学教育の便益だ。可処分所得の増加分が家計の便益で、生涯便益は7,122万円。私立大学の学費は年間約140万円。高卒で働くと年間約250万円の収入となる。したがって4年間の収支差は  $(140+250) \times 4 = 1,560$  万円で、差額の約5倍が回収される。大学教育は、国・自治体にも貢献する。すなわち大卒で就職し、給与を多く受け取れば、納税額が増加する。大学教育は、十分採算に見合っている。

一方、高等教育中退者は、非正規雇用・失業・無職など、社会的弱者になる割合がきわめて高い<sup>5)</sup>。OECD 諸国の平均退学率：32%。これと比較すると、日本の退学率：3%は高くないように見える。しかし、高卒正社員比率：45.1%。これに対し、高等教育中退者の正社員比率は、7.5%である。就職できても不遇状態が続くと、社会との接点を減らし、孤立して問題を引き起こす。その影響は、社会全体に及ぶ。そのような恐れがある昨今である。

毎年一定数の中退者発生は、この種の動機的危険性の定常的湧起りとなる。そこにかかわる組織も、座視してはられない。いったん受け入れたからには、最大限の努力で卒業させる。これは在学契約に基づく大学の責務だ。

## 2.3 中退の大学運営への影響

就職率は、大学評価の1つと見做される。同様に、中退率も評価に影響する<sup>6)7)</sup>。1年間で3%退学すると、入学から4年間で、退学は1割強となる。休学も含めると、数値は更に増大し、大学運営にも影響しうる。

文部科学省中央教育審議会大学分科会将来構想部会制度・教育改革ワーキンググループが、留年・中退率などの

情報公開義務付けを了承したとする報道がある<sup>8)9)10)11)</sup>。中退率高低の良悪は、単純には判断し難いが、大学評価決定の重要指標となりうる。情報公開項目中に大学満足度もある<sup>11)</sup>。中退率と満足度がどう相関するか興味深い。

## 2.4 諸大学での中退防止対策

### 1) 早期支援システム

学生が抱える諸問題解決のため、学生支援センターを設置する大学がある<sup>12)13)</sup>。また、休退学率低減目的で「早期支援システム」を導入した大学もある<sup>14)</sup>。欠席者を早期発見し、出席を促すとともに、学生が持つ問題の整理・解決を図り、一定の成果を得たという。「欠席増・成績低下」など、中退する学生は、必ず事前サインを出している。こんな兆候が見られる学生には、適切な早期対応が肝要と報告されている。同時に、優れた指導体制の充実化が必要で、教職員の労力面での負担も必要と述べられている。大学組織全体の準備/負担も同様にある。

本学にも、チューター制度・オフィスアワー・学生支援アドバイザー制度・学生相談室・教育学習支援センター・新入生オリエンテーションゼミナール・初年次ゼミナールなどのサポート体制がある。本学では、初年次ゼミナールにて「大学の学び」に臨む心構えを教授する。また、学生支援アドバイザーが授業出席状況をモニターし、低出席率学生にメールしたり、チューター教員や保護者らとともに面談して、細やかな対応を行っている。

初年次教育やサポート体制構築は有効だが、これらだけでは休学・中退低減は望めない。多くの大学で、初年次教育などに取り組むが、初年次教育を受けた2年次以降も、休学・中退が一定数いる。システム構築だけでは、容易には中退低減に結び付かない。

「欠席増・成績低下」は、既にダメージ発生状態で、ここからの回復には、より大きな労力を要する。対処だけでは不十分。予防策と併せたシステム構築が必要で、プロアクティブ(事象発生前)な指導が不可欠だ。

### 2) エンロールメント・マネジメント

エンロールメント・マネジメント(EM)が、効果的にシステムを構築するためのエビデンスとして、リテンションに大きな役割を果たすとの報告がある<sup>5)</sup>。教職員個人の努力だけでなく、大学全体で学生の学力・就職・生活などをサポートし、退学率低減を図る。EMは、マーケティング手法を応用したインスティテューショナル・リサーチ(IR)に基づく。フィールドデータ把握、学生の知識・技術・人間力伸長、大学への期待・満足度・目標達成感の向上を目標とする<sup>15)</sup>。大学が、学生の要求に叶うよう改善されることが期待される。

「取得データが予想外で、IRの意義有...」との報告はあるが、それを活用し成果に至ったという報告は、管見の

限り多くない。システム構築に留まらず、取得データをいかに解釈・活用して有効な施策に繋げるかが重要だ。

### 3) モチベーション理論

モチベーション理論に基づく方策の報告もある<sup>16)</sup>。学生指導を通じ、学生の勉学習慣付けを指向する。指導教員が学生と信頼関係を結び、対話を重ねることで、意欲を高め、学生が自律的に動けるようになる。また、定期的な自己実現欲求確認が有効だ、とされる。4章でも述べるように、理論に基づいたアプローチは参考になる。

## 3. 勉強が苦手な学生の状況

### 3.1 勉強が苦手な学生の割合

勉強が苦手な学生は少なくない。2年次の学生約200名に「苦手なもの」を問うと、16%が勉強と回答した。また、英語か理科系科目が苦手と答えた学生が12%。合計して約3割。データのばらつきから統計的に約8割(3σ)の学生が、潜在的に勉強に苦手意識を持つと推定される。

### 3.2 勉強が苦手な学生の感覚

「学習性無力感<sup>17)</sup>」：これが、勉強が苦手な学生の典型的感覚の一つと考えられる。テレビゲームならボタンを押すと瞬時に画面が反応し、刺激的迫力を味わえる。勉強は、やっても直ぐには面白みを感じない。教科書を読んでもわからない言葉がある。言葉は調べればよいが、その解説にまたわからない言葉が出てくる。やってもやってもやはりだめ。「そうだったのか...なるほどすごい!」などの感動もない。そんな状態が続けば、結局やる気をなくす。やるだけ無駄と考え、長続きせずに止めてしまう。

## 4. 意欲付けの施策

### 4.1 勉強嫌いの原因

勉強嫌いの理由は、「なかなか理解できない、覚えることが面倒」などがあり、次のように整理される<sup>18)</sup>。

<勉強嫌いの原因>

- ①理解ができない
- ②やっても成果が出ない
- ③なぜ学ぶのか...学ぶ意味や目的が理解できない
- ④やらされ感に対する反発心
- ⑤ストレス

勉強をしようとしたが続かず、スタック(stuck:立ち往生)する。これら5つは、その原因だ。1度でもこうなると、悪い意味での学習の効果が、次には手も付けなくなる。つまり勉強は苦手だ!という強い固定観念ができる。勉強をし続けるには、「能力」と「やる気」が必要だ。問題に遭遇したとき、これを乗り切ろうという「やる気」を持ち、解決を図って打開できるかどうか...それが、勉強を続けるか、やめるかの分かれ道となる。

原因①②は、「能力」の問題で、やり方によって改善できる。原因③④は、「やる気」にかかわる。目的・目標もなく勉強すると、「やらされ状態」となる。原因⑤ストレスは、①~④に起因し、これらが解決できれば解消される。

### 4.2 勉強が苦手な学生のサポート方法 ~指導の精神~

「やってみせ 言って聞かせて させて見せ ほめてやらねば 人は動かじ」：山本五十六の名言にもあるが、人を動かすには手間と時間がかかる。「学習性無力感」に陥った学生には、このような精神で接する必要がある。

高等教育への進学率増とともに、進学目的が不明瞭なまま入学してくる学生が増えている。また大学では、それまでの受け身学習から、能動的学修に変わる。このギャップに追従できず、意欲減退する学生がいる。

「大学における学び方を学ぶ支援」が必要だ<sup>19)</sup>。自力で歩き出すまで、背を柔らかく押し続ける。この自力で歩むことは、学生が大学入学前に会得すべき能力である。理解ができずスタックする者には、手取り足取りの対応をする。「やればできる」と「自己効力感<sup>17)</sup>」を感じさせる言葉で励ます。そうしながら、簡単なことから優しく教える。基礎を理解し、次へ進むための勢いを付けてやる。はずみ車に運動エネルギーを与えてやる感覚である。

学修の道は、平坦ではない。途中幾多の障害がある。しかし、元気付けて進み続けさせ、「達成欲求<sup>17)</sup>」を満足させる。そしてまた消耗し、エネルギー0で停止する。更に進むためには、更にエネルギーが要る。いつまでもサポートが必要だと、なかなか立ち立ちはできない。

筆者は、休学・退学予防の観点から、先の5つの「勉強嫌いの原因」が発生しない施策実施が必要と考えている。次節にて、スタックから抜け出し勉強を継続するテクニック、4.4節以降にて「やる気」創出のためのモチベーション理論を整理し、その具体的施策を検討する。

### 4.3 勉強を教えるはいけない

勉強嫌いの学生に勉強を教えるはいけない。教授内容が理解できないので、「やりたくない...」と体が拒絶する。その場しのぎで、結局無駄で無意味となる。

従来の一般的授業方法：系統学習では、学習内容を教員が板書する。学生はそれを見て、終始機械的にノートに書き写す。復習前提で、授業出席だけでは、内容も理解できず、関心もわからない。ほとんどの学生は、復習などせず勉強は試験前に初めてノートを見返す程度に留まる。よほど努力しないと理解できず、そこでスタックする。

系統学習は、学生に短時間で多く情報伝達できる長所がある。その一方、学生の精神を容器と考えそこへの知識注入が教授法としており、前近代的教授法と批判されている。最近アクティブ・ラーニングなどが反動として、盛んに導入検討されている。しかし、戦後一時的に流行ったが、基

礎学力低下を招き、ふたたび系統学習に戻った経緯がある。施設完備や教員の熟達が求められる。

いずれにしても勉強は、自分で考え、解答を導き出さないと身に付かない。まずは、自ら「勉強をしよう!」という気持ちを注入する。拒絶のガードを崩し、受け入れ態勢を取らせることが、第一段階だ。容易ではないが、勉強の有用さ・必要性を理解させることで自発的態度を導きうる。これができれば、学生の学修態度が変化する。

### 1) 学修の障害を乗り越えるために必要なこと

#### 勉強テクニック ～スタックからの脱出方法～

自発的態度を導き出せても、なかなか理解できないことに変わりない。「勉強したい...」という準備が整ったら、次に勉強のやり方を教授する。スタックしたときにどうすればよいかの知恵・対処法を教える。勉強嫌いの原因①②の対策として、とにかくわからなくなったら

①「調べる」 i) 複数のウェブサイトを調べる

ii) 複数の教科書、参考書を探してみる

②「人に聞く」

これらの徹底が必要だ。わからなくなったとき、調べる/人に聞くという習慣が未だない学生が多い。しかしこれで解決すれば、スタックから脱出できる。

① i) 複数のウェブサイトを調べる

ほとんどの学生は、スマートフォンを持っている。わからないことがあれば、まずは自分で調べてみる。それによって解決することもある。ウェブ上には、さまざまな、わかりやすい解説サイトがある。上手く調べると、いろいろな疑問を解消できる。また同じ文言について、複数のサイトを検索すれば、それぞれに異なった説明があり、多角的解釈ができる。すなわち、理解が深まる。これらを活用する習慣がつけば、自分で乗り越える手段として有効だ。

① ii) 複数の教科書・参考書を探してみる

大学の教科でも、複数の教科書・参考書を探してみる。著者が違えば、記述も異なる。同じ事柄でも、異なる説明をしているものを見る。そうすると、多角的に解釈でき、理解できることがある。図書館などを利用して、複数の書籍を必要ときだけ見ればよい。異なるウェブサイト・書籍で、説明が同様：その場合は、その説明が本質的と捉えそこに集中できる。同じ記述であれば、それで理解するしかないという諦めもつく。今一度、その記述を噛み締め、意味を考えることで、理解に至ることもある。

②「人に聞く」

それでもわからないときは、周りの学生・教員に聞く。一人で長時間考えあぐねると嫌になる。なので、質問させてそこで止まらないよう指導する。しかし、いつも人に聞けるわけではない。この①②両方の手段を活用し指導を受け、障害を乗り越えたら次は自分で調べる。そうした能力・

習慣を身につけさせる。本学の教育支援センター (LAC ナビ) などを上手に活用指導することも1つである。

### 2) スタックに陥らない具体的施策案

教員の近くで勉強させる方法がある。筆者も実習室を開放し、レポート作成を許している。皆で集まれば、互いに相談できる。課題を理解している学生がいれば、ほかの学生に教えることで、自身の理解もいっそう深まる。理解している学生を見ることだけでも刺激を受ける。学生同士で解決できなければ、教員に聞いてくる。「コモンルームでオフィスアワー」的に対応する。これで学生はスタックせず、最小の時間で集中して課題を処理できる。

レポートはコピーできないよう、一人ひとりデータを変えている。レポートを見せ合っても、写して終わりということはない。同時に授業でも、技術者倫理を説明する。他人の論文盗用が問題だと説き、コピーしないよう指導している。学生が教える内容は、問題の解答ではなく、解答を得るための方法である。

### 4.4 やる気

#### 1) 施策の前提 ～なぜ勉強をするのか?～

工学の勉強は、仕組みを理解し、問題の解法を学ぶ。しかしこれは、頭の体操のためではない。勉強の目的は、端的にいうと、知識・能力を身に付けエンジニアになるため、そのために学生は大学に入学した。勉強するには、頭を駆使するが、その前に、「なぜ勉強をしているのか?」の目的・理由を理解していないと、モチベーションが保てない。その勉強が自分にとって意味があり、必要だと感じなければ、学修意欲がわかない。

#### 2) 勉強をやる理由 ～苦行の対価は何か?～

勉強をさぼるときにやらない理由をいうのと同様、勉強するには、十分なやる理由が必要だ。勉強しない学生は、できない言い訳をする。時間がなかった、家の事情が〇〇だったから等々、やらない自分を正当化する。

学生は、苦行的勉強をやる対価として十分な価値が見い出せないと、必要と思いつつも逃げ腰の自分を引き留められない。貨幣経済の蔓延で、即時の等価交換が価値観の基準となっている若者は、何事に対してもやるだけの価値があるかどうかと対価を弾く<sup>20)</sup>。大学の授業は、直ぐには役立たない。一生使わないものもあるかもしれない。そんなものを、なぜ辛い思いをして学ばなければならないのか? そう考えると、やはり意欲がわいてこない。「無駄な勉強はしない!」と、声高に宣言する学生もいる。

レポート感想文に、「今回の授業内容は、将来必ず役に立つと思われるので、これからも勉強していきたい。」と書く学生がいる。何かわからないが、「将来出てきそうだ」とでも思わないと、勉強する意義がなく、意欲がわかない。意義がなければ、勉強はしない。至極単純明快である。学

生は、このような判断を無意識に行っている。

### 3) モチベーション理論<sup>(7)(21)(22)</sup>

行動には、必ず動機がある。逆に行動するには、動機が不可欠。3人のレンガ職人がいた。旅人が何をしてるのか尋ねた。「レンガ積みが決まってるだろ！朝から晩まで、ただレンガを積むだけだ。腰は痛くなるし...」。その先で2人目の職人に会った。「ここで大きな壁を作っている。おかげで家族を養ってける...」。3人目の職人に会いたまた尋ねた。「歴史に残る偉大な大聖堂を造っている。ここで多くの人が祝福を受け、悲しみを払うんだぜ。素晴らしいだろう！」... 後世に残る事業に加わる/貢献が目的。目的が明確で、それにどう貢献できるのかを考えるからこそ、より良い仕事をしようと積極的姿勢が生まれる。

モチベーション理論の始まりは、「科学的管理法」(Taylor 1911)とみられる。「フォード」が自動車の生産現場に取り入れ、生産性を向上させた。

- ・「人間関係論」(Mayo 1933) : 「科学的管理法」は、労働者を組織の歯車のように扱うとの強い批判があった。Mayoは、この欠点を正し、生産性は、人間関係・感情的動機付けで決定されるとした。
- ・「欲求5段階説」(Maslow 1943) : Mayoの研究を更に高次化し、欲求を「生理的欲求」「安全欲求」「社会的欲求」「承認欲求」「自己実現欲求」と階層的に分類した。現代でも多くの研究分野・実業界で多大な貢献を残す理論として知られている。その根底に、人間は自己実現のために成長・発展することを目指す生き物だとする考え方があり、「自己実現論」とも呼ばれている。
- ・「二要因理論」(Herzberg 1959) : モチベーションは、「動機づけ要因:仕事内容からの満足感」と「衛生要因:仕事環境からの不満」の2要因で決定付けられる。のち(1973)に、本人の目的意識など、内なる心のエネルギーを高める「内発的動機」と、外からの報酬増で意欲を引き出す「外発的動機」の考えを示した。「衛生要因」は、報酬制度や作業環境で、「内発的動機」を刺激せず、満足感に繋がらないとした。
- ・「X理論・Y理論」(McGregor 1960) : Maslowの思想を更に深化させ、管理者行動の観点を盛り込んだ。X理論は、命令や強制:目標未達成で罰といった「アメとムチ」による管理手法。Y理論は、魅力ある目標と責任を与え続けることによる「機会を与える」手法である。
- ・「未成熟-成熟理論」(Argyris 1961) : 人は自己実現に向けて、絶えず成長する存在であるとした。
- ・「ピグマリオン効果」(Rosenthal 1964) : 教師の期待で成績向上する。期待を言わなくても、態度や言葉の節々で察知し反応する。逆に期待小だと成果が低下する。
- ・「学習性無力感」(Seligman 1967) : 抵抗も回避もできな

いストレスに長期間さらされると、無力感が生じ、鬱病似の症状を呈して不快状況から逃げもしなくなる。

- ・「目標設定理論」(Locke & Latham 1968) : 目標困難度と成果は比例する。明確・具体的・高目標が、高い動機づけ効果をもつ。1950年代にドラッカーにより「目標管理」(MBO: Management by Objective) という形で既に提唱されているが、このMBOの理論的背景として説明されることが多い。

- ・「アンダーマイニング効果」(Deci & Lepper 1971) : 褒美自体が目的に代わり、褒美なしではやる気を失う。

- ・「自己効力感」(Bandura 1976) : 自分は成し遂げられるという確信・信念の高/低が、業績に影響を与える。

これらは、企業就労者のためのワークモチベーション理論として展開されてきた。これらを総括し、学生に適用して考えると、以下となる。

- 人は「アメとムチ」の外発的報酬や圧力より、**内発的動機**を刺激するほうが、モチベーションが高まる。

- 「(感情や心の満足に働きかける) **明確な学修目的意識を学生が持つこと**」が有効で、自己実現に向けて成長しようという気持ちで、「やる気を高揚」させる。

- 活動の着手段階、すなわち、1年次の期初に目標設定をすることが最も有効である。

#### 4.5 “夢”を持つこと

学生に、「夢を持つことが必要」と伝える。言い古された感もあるが、「Boys be ambitious!」の精神にも通ずる。夢にもいろいろある。特に、将来どんな職業につきたいか...、それを各自、夢として考えるよう指導する。夢は勉強の目的であり、「実現させたい願望」というモチベーション理論の自己実現をあらわすものとして用いる。

夢というと、甘い雰囲気かできるかもしれない。厳しい家庭環境や社会の制約から、なかなか夢など描けないという状況もある。しかし、「目標とする進路」を自分で選択することはできる。それを夢と位置付ける。勉強理由は、必ずしも夢の実現でなくてもよい。「勉強すると親が喜ぶ。喜ばせたいから勉強する...。」理由になればこれでもよい。とにかく、卒業まで勉学を続ける意欲を持たせたい。しかし、夢という目標を持てば、**やりがい**を持ち日々の生活に張り合いを持てて、より有効と考える。

#### 4.6 将来の目標としての“夢”

学生に、将来の夢・やりたい仕事を問うとき「未だ考えてない...」という者がいる。すなわち、自分の将来を何も考えていない状況だ。「では、弁護士になるか?」「医者になるか?」と問うとそれは否定する。つまり、具体的には考えていなくても、機械系学科の学生であれば、やりたいのは、大まかに機械工学系の仕事だ。

機械工学系でも範囲は広い。何も考えていないというの

は、機械系のなかで何になるかを決めていない状態...といえる。しかしそれでも、目標を意識していないと、現在の勉強の意義・目的を理解していないことになる。そこで、夢を持つ重要性を説き「その夢を実現するため、今の勉強をやっている」ということを意識してもらおう。

せっかく取り組もうと教科書を開いても、わからなくなると止まってしまう、それ以上先に進めなくなる。考えても時間の無駄...と思う。逆に、いろいろな方法を使って、少しでも理解できれば、自分の夢に近づく。このとき、ある種の喜びを感じるはずだ。調子に乗れば、その周辺のことにも興味が沸き、更に学修を深めたいくなる。心の底からやらなければならないと納得し、それを一生懸命やるようになれば、それがやりがいとなる。そしていきいきとやるようになる...という可能性を秘めている。

最初に述べたとおり、これらの話をするのは、学業を途中で挫折せず、卒業まで導くためだ。工学部の学生の将来目標は、エンジニアに分類される。エンジニアにならないのなら、工学の勉強意義は小さくなる。もし夢がエンジニアでないなら、早々に適切な進路に変更したほうがよい。そのような選択の結果、中退・転学するのであれば、それは挫折ではなく、積極的な選択の姿勢である。

#### 4.7 丁寧な指導と勉強を行う決心

機械系学科では、数学・物理学、機械力学をはじめとするいわゆる四力学などを学ぶ。どれも奥が深く、容易には習得され難い。これは、教える側・教え方にも問題があるかもしれない。誰もが理解できる平易な事実から出発し、わずかな飛躍もなく順序よく説明しないと、最終的理解に至らない。結果だけ示して覚えろと言っても、「理解できないものは、記憶もできない...」となる。

寸分も飛躍なく説明できても、その説明が理解できない場合もある。そんなときは、少なくともわかった気分になるだけでも止む無しとする。式ではなくイメージを多用し説明する。表面的にでもなるほど...と理解すれば、記憶となって残る。細かい説明は、後付けで構わない。そう個々人のレベルに合わせて指導すれば、理解の助けになる。だがマスプロ教育では、なかなかそこまで手が回らない。そうなるとうやうや勉強は難解という認識は変わらない。

もし意義を解しながらも、内容が理解できず単位を落としそうになれば、とても悩むであろう。理解しなければならぬ。しかし難しく理解できない。これはジレンマだ。このとき平易に説明してあげると、ジレンマからの解放になり学生は喜ぶ。このような学生は、教え甲斐がある。

手間はかかるが、この最初の取り掛かりが重要だ。いったん勉強することを納得できれば、それ以降は自動的にやるべきと考え、やるか否かは判断不要になる。あとは、重たい腰を持ち上げるパワーを持っているかどうかだけだ。

嫌でも勉強に着手し、一歩でもスタートが切れたら、わからないことがあっても、ネットで調べたり、周囲の友人や教員に聞いて進めることができる。

## 5. 大学生の意識

学生生活には、さまざまな面がある。そのなかで学ぶ意義；つまり大卒メリット・中退デメリットを理解していない学生がいる。これも入学前、または初年度中に理解しておくべきだ。「学業不振」の学生は、苦し紛れで勉強から離れたいと考える。冷静に考える余裕がない。したがって、中退を考える前にぜひメリット/デメリットを理解し、そのうえで行動をしてもらいたい。

### 5.1 学生の“金”に対する感覚

学生は皆、漠然とだろろうが潜在的に金に欲望を持っている。『新入生オリエンテーションゼミナール』で、将来何になりたいか聞いた。するとある12人の班で半数が「金持ちになりたい」と答えた。「将来どんな職業に就きたいか?」という意図で聞いた回答がこれだった。

学生に「金持ち脳と貧乏脳」<sup>23)</sup>という資料を見せ、それぞれの特徴を説明する。そうすると「貧乏脳」にはなりたくない、早めにレポートを完成させた...という学生が多く出た。お金の話には、敏感に反応する。やること何でも対価を求める学生には、このような経済観念を植え付け、日々の生活を律することも有効だ。

### 5.2 学生のコスト意識

製造業では、ラインで1秒でも作業時間を短縮しようと奮闘する。作業時間を短縮すると「短縮時間×生産数量×製造ライン数×作業日数分」だけ時間が短縮される。累積すると、相当量の削減になる。

同様に学生にもコスト意識を持たせ、どんなときもお金を消費しながら生活していることを意識させることが有効だ。学費が年間約140万円、一カ月の生活費は諸々含め8~18万円(一人暮らしか否かで変化)とすると、月額20~30万円となる。1日当たり学費は、単純計算で約4,000円、生活費を合わせると6,500円~1万円。寝ても覚めても1時間あたり270円~410円が1日24時間消費される。留年するとこれらを1年多く支払う。2019年現在、入学から卒業までの必要単位数は124単位、年平均31単位、講義各30回。学費年額約140万円を90分授業に換算すると、**講義1回当たり約3,000円**( $\div \text{¥}1,400,000/31/30 \times 2$ )。

これを意識すれば時間を無駄にはいけない/授業は、しっかりと聞いていなければいけない/留年してもいけない...という堅実な意識がわからないだろうか? 逆に、授業に満足できないと「今日の授業は、3,000円の価値があったかな!? ...」などと思われてしまうかもしれない。

### 5.3 満ち足りた生活水準

現代は、生活水準が上昇し、衣食住などの生理的欲求・安全欲求という低次欲求は満たされている。このようなとき、アメ・ムチのX理論による管理は、学生欲求に合わず、モチベーション効果は低い。すなわち、やらなくても食物に困らない。叱られても憤るだけで「まずいことをした」とは思わない。

一方教員は、学生に何とか従って欲しいとばかりに、信賞必罰的な扱いをすることがある。一昔前なら、殴って従わせることもあっただろう。しかし現在では、高圧的に指示するだけでもアカハラと捉えられ非難される。罰と同時に褒めることも、人を従わせる場合、同様な弊害がでる。すなわち本人に判断をさせず、一方的にアメで釣って行動を押し付けることになる。必要なことは、正しい原則を確立し学生がこれを理解・同意するように導くこと。これは、アメ・ムチのX理論ではできない。X理論は言わば、動物を調教するような粗暴な方法である。

良くない行いを見ると、直ぐ叱りたくなる人がいる。行き過ぎた折檻という、悲惨な報道もある昨今だ。そのような感覚は一昔前のもので、現代では受け入れられない。そう社会が変化している。だが世間一般には、これが未だ十分受容されてないかもしれない。だから子供が良くないことをすると、直ぐに叱って直させねば...と思う人がいるとされる。低次欲求充足の現代では、Y理論に基づいた方法のほうが有効性が高い<sup>24)</sup>。なので「サボると叱られるよ！ / 痛い思いをするよ！ ...」といった言い方より、「頑張って小さい頃からの夢を、ぜひ実現しよう！」という向上心に働きかける言い方のほうが、時代に相応し、結局は効果につながっていく。

## 6. 具体的施策 ～「目標管理」～

### 6.1 「目標管理」

学生が意欲を持ち、学修を継続するには、「目標管理」を実行することが有効だ。学生に将来、および、年次の目標を設定させ、指導教員からフィードバックをもらう。期初に設定し、期末、または次の期初に、面談にて成果を確認する。これは「目標設定理論」に基づくもので、既に多くの企業で士気向上・社員評価に導入されている。このように、既に効果が実証されている手法を取り入れることが有効と考える。学生も目標を自分で設定し、それを意識しながら学生生活を過ごすことで、自覚とモチベーションを保持することが期待できる。

### 6.2 学生ポートフォリオシステム

本学には、広島工業大学ポートフォリオシステム (HITPO) の中に「学生ポートフォリオ」がある。履修計画・課外活動・将来設計・就職活動など、大学で行う活動を記

入する。この中に、「将来したい仕事・興味ある企業・年次ごとの行動計画」などを記入する箇所がある。この活用で、学生の「目標管理」が実現する。大変よく考えられているシステムである。

これらの記入項目は、チューター面談の指導材料として活用される。しかし回答は任意で、必ずしも全てが埋まっているわけではない。学生によっては、特に目標を持っていないなどで、何も記入していない者もある。工学部のある学科の2～4年生 (280人) を対象とし、システムへの回答状況と学生の総合成績との関係を図2に示した。回答記入項目の中から、特に将来目標やキャリアプランに関係深い11項目を取り上げ、総合成績は、評価点の平均値 (Grade Point Average : 以下 GPA) を用いた。

図2から、将来計画・目標をしっかりと回答・登録した学生ほど、その後の成績が上位となり、回答が少ない学生は下位の傾向となることがわかる。GPA とキャリア設問回答数の相関係数は0.42であった。回答0件の中には、わからない・未定の回答も含む。またこれらのデータの内、休退学者の回答数/GPA は少ない方 / 下位に集まっている。(成績上方に休退学者がいるが、「進路変更」と「健康上の理由」であった。)

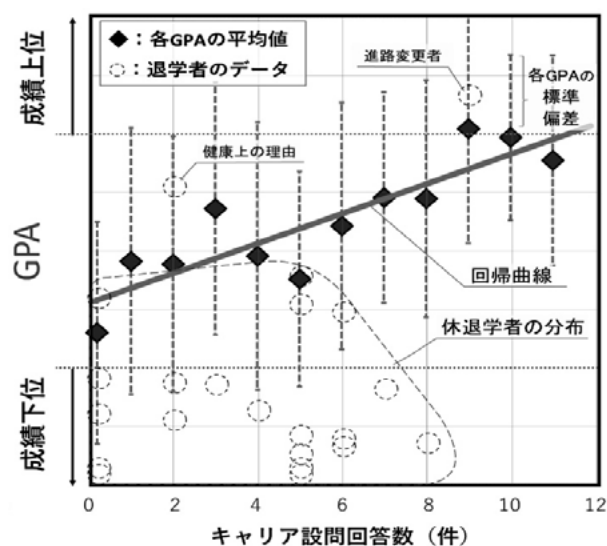


図2 設問回答数と GPA の関係

これは、記入件数と成績の因果関係を示すものではないが、モチベーション理論にもあるように、目標設定し、システムへの詳細回答によって動機付けされ、成績が上がり、休退学者の分布から外れていくことが期待できる。

システム入力は、1年次の11月頃から始められる。本稿執筆時点でまだ記入していない者もいるため1年生データは未採用だ。「目標管理」の効果を上げるためにも、目標記入は、期初などの早い段階で行うことが望ましい。

キャリア以外に、履修科目にも本システムは活用できる。

どの程度成績を取るか目標を立て、次の期初面談時にそれを振り返る。計画どおり成績が取れば褒め、それ以下であれば、原因を聴取して、次回は挽回するよう励ます。そうすれば有意義な面談になると確信する。このとき指導教員には、十分な指導方法の理解が求められる。「ちゃんとやらなくちゃ、ダメじゃないか！」といった言い方は逆効果。高圧的指導で未達を責めるのではなく、学生が置かれているさまざまな状況に共感し、「…そうなのか、なるほど、では次は頑張ろう！」などで理解を示す。それにより、相互に信頼関係を生み「自己効力感」を高めて「やる気」創出の効果がある。この辺の指導要領を整備・理解したうえで、システム活用に臨むことが肝要だ。また、システム活用促進のため、各入力に対し、学生に何らかのポイント付与するなどを講ずることも有効と考える。

### 6.3 効果的な夢の設定方法

以下「目標設定理論」に従い夢の効果的な設定を考える。

- ①夢という目標は、少し背伸びをする位がよい。実現性ばかり考えると夢が委縮する。したがってこの時点では、何も制約をつけず、実現性は問わない。最初に夢を考える場合、つまり出発時点では幼稚であってもよい。「自動車がカッコ良く小さい頃から好きだったので、将来は自動車メーカーに勤めたい…」でも構わない。何も制限を付けないことが、自由な発想には必要だ。
- ②実現したら飛び上がって嬉しい！と思えるほど素晴らしく、ワクワク感じるものを選ぶ。それを実現しようとするとき、幾多の困難に耐えられるほど強大なパワーを発揮するものでなければならない。
- ③夢は、具体化することが重要。実現した状態を、空想で疑似的に味わいイメージする。それにより、理想や計画に落とすとき具体的になりやすい。理想化・理想的というように、夢の神髄部分を現実から抽出し、より具体化したものが理想だ。夢が実現し理想が叶ったときのうれしい！、楽しい！という感覚を想像して味わうことが大切。それがパワーの源泉となる。
- ④夢実現の期限を設定する。これも夢の具体化作業だ。夢から理想に落とし込み、そこへの道筋を計画にまとめる。するとP D C AのP:Planができる。Pの次は、D:Do:実行で、実行すれば実現する。逆に、実行しなければ、何も実現しない。途中で希望が変化し、内容を変えてもよい。常に状況判断し、必要に応じ方向修正を行う。これがC:Checkとなる。そして、修正された新計画実行が、最後のA:Actとなる。このループを繰り返す。実現すれば夢は成就、すなわち成功だ。夢とは、人生設計上の構想設計図であり、目標・ゴールである。

## 7. 今後の課題

昨年度の2年次の中退者数は、前年度比で大きな変化はなかった。「夢を持つことが重要」という話を聴き、多くの学生がポジティブに受け止めた一方、授業に出席し話を聴いていても、結局中退してしまった学生がいる。ただ話を聴いただけでは、効力を発揮しない。実際に夢を設定し将来計画を立案して、それを意識し学修に臨む姿勢を示すところまで導くことが重要と痛感した。

近年、日本の就学人口が減少する一方、中国・ベトナムなど、特にアジア系の留学生が急増している。AIの台頭も新たな競争だ。日本をはじめ先進諸国では、人手不足と相まって更なる高生産性が求められる。そんななかで若者一人ひとり、社会を回す重要な構成員だ。将来を担う人材にとり、大学は社会への通り道である。大学は社会の維持向上のための、基礎力輩出の重要な役割がある。改めて大学の重要性を認識する。

### 7.1 発達障害などへの対応

ここまで健常者（定型発達者）の学生前提で話を進めてきた。しかし近年、発達障害傾向の学生も多く入学するようになった。背景には、進学者数減少・大学ユニバーサル化、入学ルート・選抜方式多様化も関係する。同時に休・退学者が増加し関連性が示唆されている<sup>25)</sup>。

修学の進み具合は、学生生活の指標となり、うまくいってないことは、何らかの個人的問題を抱えていることを反映している<sup>26)</sup>。しかし原因の一つに、発達障害・知能障害類似の特性がある。特に、聞けない・見れない・想像ができないという認知・知能障害があると授業理解が大幅に低下する。すなわち、教員の声が聞こえても理解せずスルーする。板書で見たものを正確に把握できず、うまくノートできない。想像ができないと、さまざまな行動の結果の将来が思いつかない。勉強の将来における重要性・必要性が理解されにくい。唐突ではあるが、非行少年は、これらの能力が著しく低いという実態がある<sup>27)</sup>。学生には、ぜひともこの対極方向へ育って欲しい。

これらの認知力等は、学修の基礎的能力となる。したがって、アドミッションポリシーに必要能力を明記し、選抜段階で確認するか、入学後にこの認知能力増強のカリキュラム編成をすることが求められる。障害特性を理解し、それをカバーする手法対応は、学修が苦手な健常者にもかなり参考になり有効だ。今後の授業・学生への接し方の課題として掘り下げたい。

## 8. まとめ

中退低減のため「学生が学修を継続するための意欲付け」を志向し、方策を検討した。そして現状整理して、方策案



を述べた。学生が学業を継続し、休学や中退に至らぬためには、以下が重要と考える。

- 1) 生活態度の見直し：学生が大人として自覚し、自分の行動を意識して責任ある振舞をするよう指導する。
- 2) **人生を考える**：学生が、時間と将来を意識し、計画的に生活する態度を養うよう、また、刹那的なことにとられず、自分自身を客観的に捉えるよう促す。
- 3) **学生の勉強嫌いの対策**：原因を解消するよう指導を徹底する。学生の勉強嫌いの原因は、
  - ①理解ができない
  - ②やっても成果が出ない
  - ③学ぶ意味や目的が理解できない
 ①②には、調べたり、人に聞いたりすることを習慣化させる。③には、**勉強する理由**を意識/自覚して持つように働き掛ける。これらにより、勉強途中でスタックせず継続できるように指導する。
- 4) **夢を持つこと**：3)の**勉強する理由**、および、目標・目的として、なりたい職業を将来の夢として持たせ、その実現のため勉強する、というよう指導する。夢は、①**少し背伸びし**、②**想像するとワクワク**と感じ、③**疑似的に味わってみれるほど具体的にイメージ**すること、さらに④**明確な期限設定**が重要である。これによって夢が人生の計画に変わる。
 

人生の計画を持ち、それを実行しようとするのが、刹那的なことに囚われず自分の行動を律することとなり、将来の人生を考えた責任ある行動をするようになる。日々の生活に張りが出て、幼稚でいいかげんな生活を改め、目的をもってイキイキとした日々を過ごすことが期待できる。この狙い所は、本項だけでなく、本章1) 2)の事柄に対しても一貫して共通する。
- 5) **経済観念**：学生生活には費用がかかる。その対価は、大学卒業で高卒より高レベルの生涯賃金が期待されることだ。4年間の費用は、十分回収できる。一方、意欲喪失などで中退すると、非正規雇用、失業・無職になる割合がきわめて高くなり、生活上の便益取得が難しくなる。その結果、社会的弱者となる危険性が高まる。これらの事実を、今一度認識し意識することは、中退を思い留まるのに有効だ。それらを踏まえ一瞬一瞬を有効に活用し過ごす意識を学生に持たせる。
- 6) **目標管理**：以上各項の具体的実践手段として、学生が年次ごとの「目標管理」を行うことを推奨する。将来のキャリア(夢)、年次目標を期初に設定させ、期末の面談時に、成果を確認し、指導教員からフィードバックをもらう。このように、既に効果が実証されて実際に活用されている手法を取り入れることは有効だ。

本学では、HITPO/「学生ポートフォリオ」を活用

することで「目標管理」が行え、既にそのように活用されている先生もいらっしゃる。この活用と成績には相関がある。機械的にシステムの項目を埋めるのではなく、今一度、この有用性を教職員・学生がともに理解し、しっかり活用することで、更なる学修のモチベーションアップが図れる。指導には仕方があり、力量も求められる。指導要領を整備し、全教員がそれに基づいて指導していくことで、システムへ機械的に回答記入するのではなく、有機的活用が期待できる。「目標管理」で、「学修意欲の維持向上」を図り「成績向上」とともに、未然に「リテンション」実現が期待できる。

また大学としても、学生のサポート体制に継続してPDCAを回す。それとともに、授業の質確保のため、開かれた議論のなかで、各教員の自主性・自律性を尊重しつつ一定の基準を維持する定量的評価システムの構築検討が求められる。EMも検討課題である。さらにこれからは、発達障害考慮・対応を前提に準備する必要がある。

## 9. おわりに

筆者の検討した「学修を継続するための意欲付け施策」を述べた。根底には、本学の建学の精神「教育は愛なり」：常に我が子を慈しむような気持を持って学生に接する姿勢を貫かねば...という感情が大きなポジションを占める。この建学の精神は、教育方針：「常に神と共に歩み社会に奉仕する」とともに、時代や環境が変わろうとも本学園にとって変わらぬ核であるとされている<sup>28)</sup>。

本学は、市街地に面しながら宮島をはじめ瀬戸内海の島々を見下ろし、ホテルにいなさいと言われるほど風光明媚な地にある<sup>29)</sup>。四季折々花木が味わえ、校舎内外問わず清掃が行き届いている。3つの食堂と売店、図書館をはじめ、実習室・実験室・工作センターなどの施設が整っており、正面には堂々とそびえ立つ美しい校舎を有する。本学の学生には、ぜひこれら歴史ある本学の思い出とともに、有意義な就学期間を過ごしてもらいたい。

今後とも更に改善を図り「学業不振」での休学・中退がなく、学生が入学して良かったと思え、いっそう有意義な学生生活を過ごせる大学となるよう尽力していきたい。

## 謝 辞

本稿には、長年教育に携わる広島工業大学の多くの教授陣をはじめ、同工学部 知能機械工学科の諸先生方の日々のご指導が深く反映されている。ここに深謝の意を表す。また、関西学院大学理工学部 先進エネルギーナノ工学科 大谷昇教授に、内容についてアドバイスを頂いた。ここに深謝の意を表す。

## 文 献

- 1) 文部科学省「報道発表学生の中途退学や休学等の状況について〔抜粋〕」、私学経営研究会〔編〕『私学経営』、pp. 86-92、法友社、2015
- 2) 労働政策研究・研修機構「大学等中退者の就労と意識に関する研究」、労働政策研究・研修機構編、(JILPT調査シリーズ138)、労働政策研究・研修機構、2015
- 3) 下瀬川陽「高等教育中退理由の変遷と職業への移行との関連」教育ネットワークセンター年報、東北大学大学院教育学研究科、2016
- 4) 矢野真和「教育家族の逆説」『現代思想2014年4月号特集=ブラック化する教育』p173、青土社、(2014)
- 5) 山本繁他 ラウンドテーブル② 初年次教育は「学生の定着」に寄与できるか? -エンrollmentマネジメントを意識したシステム創り- 3 話題提供②日本における中途退学防止問題の概観と各高等教育機関における身の丈に合った中途退学防止に係る対応策 <[http://www.jafye.org/wp-content/uploads/RT\\_list\\_20160725.pdf](http://www.jafye.org/wp-content/uploads/RT_list_20160725.pdf)>、2016、(参照2019-1-15)
- 6) 読売新聞教育ネットワーク事務局『大学の實力2019』中央公論新社、2018
- 7) 大森昭尾他編『今選ぶなら、地方小規模大学! ~偏差値による進路選択からの脱却~』レゾンクリエイト、2018
- 8) 文部科学省「大学改革について」、平成30年5月16日、<<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinsei100nen/dai7/siryu3.pdf>>、2018、(参照2019-2-4)
- 9) 中央教育審議会大学分科会将来構想部会 制度・教育改革ワーキンググループ「学修の質保証の向上に関する取組について」、平成30年3月26日第12回) 資料、<[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryu/\\_\\_\\_icsFiles/afeldfile/2018/04/18/1403936\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryu/___icsFiles/afeldfile/2018/04/18/1403936_1_1.pdf)>、2018、(参照2019-2-4)
- 10) 日本経済新聞「大学の留年・中退率公開義務化を中教審WG」、2018/9/18、<<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO35475680Y8A910C1CR8000/>> (参照2019-1-28)
- 11) 朝日新聞「中退率や満足度…大公開時代 大学選び、偏値以外にも重視」2018年5月1日付朝刊、10(17)
- 12) 岩田弘三「大学における中退の実態とその防止に向けた取り組み」The Basis: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要8号、pp15-26、武蔵野大学教養教育リサーチセンター、2018
- 13) 河合塾「Part.5 退学・除籍者数を少なくする取り組み-Kei-Net」、Kawaijuku Guideline 2015特別号、pp. 60-71、<[https://www.keinet.ne.jp/gl/15/s/15\\_s\\_part5.pdf](https://www.keinet.ne.jp/gl/15/s/15_s_part5.pdf)>、2015、(参照2019-1-9)
- 14) 岩崎保道「大学における休・退学防止の検討:学内組織連携型の学生支援策に注目して」関西大学高等教育研究(6)、pp81-86、関西大学教育開発支援センター、2015
- 15) 福島真司「入学前から卒業後まで一貫して私たちの学生を知り抜くために」『Between』2012 2-3号、pp. 8-9、ベネッセ教育総合研究所、2012
- 16) 松尾理 他「学生の自律的学習へのモチベーションを上げる方策を考える」近畿大医誌第42巻1、2号、pp. 33-39 2017
- 17) BizHint「モチベーション理論とは?やる気を高めるための理論を徹底解説」<<https://bizhint.jp/report/99165>>、BizReach、2017、(参照2019-8-28)
- 18) 佐々木恵『うちの子なんとかありませんか?勉強嫌いを克服して30点上げる7つの方法』ごきげんビジネス出版、2014
- 19) 宇留田麗「修学支援」『臨床心理学』第6巻第2号、金剛出版、p206. 2006
- 20) 内田樹『下流志向-学ばない子どもたち、働かない若者たち』講談社、2007
- 21) クレイア・コンサルティング『「やる気」の構造:これがモチベーションを高める組織だ!』同文館出版、2003
- 22) BizHint「モチベーションの意味とは?低下の要因や上げる方法、測定手法や企業施策までご紹介」<<https://bizhint.jp/eyword/14195>>、BizReach、2019、(参照2019-8-28)
- 23) 茂木健一郎『金持ち脳と貧乏脳』綜合法令出版、2013
- 24) リーダーシップインサイト「マクレガーのX理論Y理論」<<https://leadershipinsight.jp/explandict/マクレガーのx理論y理論%e3%80%80mcgregors-motivational-theory-x-theory-y>>、INVENIO、(参照2019-9-11)
- 25) 福田信也『Q&A 大学生のアスペルガー症候群-理解と支援を進めるためのガイドブッカー』明石書店、2010
- 26) 三川俊樹「相談内容に応じた援助」日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編『学生相談ハンドブック』学苑社、pp69-76. 2010
- 27) 宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮社 2019
- 28) 荒武憲昭ほか編『鶴学園五十年史』鶴学園、2006
- 29) 鶴学園『鶴学園二十年史』学校法人鶴学園、1976